

〔課程-2〕

審査結果の要旨

氏名 新美 恵子

本研究は、大腸上皮性腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）の有効性と安全性を検討するために、当院で施行した大腸上皮性腫瘍に対する ESD290 症例 310 病変の短期治療成績および長期予後を遡及的に解析した。また、技術的に難易度の高いとされる大腸 ESD を安全に行うために、当院で開始した 2 人の内視鏡医におけるラーニングカーブを分析し導入基準を検討し、下記の結果を得ている。

1. 短期成績としては、一括切除率 90.3%、一括完全切除率 74.5%と高い根治性が得られた。偶発症は、出血率 1.6%、術中穿通・穿孔率 4.5%、遅発穿孔率 1.0%であった。術中出血 1 例に輸血を要したが、それ以外の後出血 4 例はすべてクリップによる内視鏡的止血術にて保存的に軽快した。術中穿孔は 14 例に認め、1 例は待機的手術となったが、残り 13 例は内視鏡的クリップ閉鎖と保存的治療で緊急手術は回避できた。1 例に遅発性穿孔を認め、緊急手術を施行した。
2. リンパ節転移高リスク群と考えられた 18 症例のうち、8 症例に対し追加外科切除を施行した。術後病理評価では、腫瘍局所残存は 2 症例、リンパ節転移は 2 症例に認められた。残り 10 症例は追加外科切除を行わなかったが、観察期間中央値 22 ヶ月では再発は認めなかった。
3. 局所遺残再発に関する検討では、観察期間中央値 30.6 ヶ月において、202 名中 4 名 (2.0%) に遺残再発が見られたが、すべて分割切除例であった。1 例のみ追加外科手術を行ったが、残り 3 例は追加内視鏡治療を行い、以後それぞれ 71 ヶ月、22 ヶ月、22 ヶ月では再発は認めなかった。分割切除例において、統計学的に有意差に局所再発率が高かった。
4. 長期予後に関する検討では、観察期間中央値 38.7 ヶ月においては、全生

存率は3年97.1%、5年95.3%、疾患特異的生存率は3年5年ともに100%であり、原病死は認めなかった。

5. ラーニングカーブの検討では、大腸ESDを開始するにあたり、上部内視鏡3000例、下部内視鏡700例、胃ESD30例の経験の必要性和直腸病変から開始の妥当性が示唆された。

以上、本論文は大腸上皮性腫瘍に対するESDの有効性と安全性を明らかにし、また、安全なトレーニングシステムの導入基準の可能性を示した。本研究は、これまで明らかではなかった長期予後を含めた治療成績を明らかにし、外科手術と匹敵する有効な治療法として大腸ESDを位置づけ、今後の治療法、技術習得法の向上に貢献すると考えられ、学位授与に値するものと考えられる。